

「資質・能力を育成する教育課程の在り方に関する研究報告書5 資質・能力の包括的育成に向けた評価の在り方の研究」 の概要について

1. 調査研究の目的・概要

(1) 調査研究の目的

本研究は、平成25年度まで実施した「教育課程の編成に関する基礎的研究」を、更に学術的に精緻化・構造化し、資質・能力を育成する教育課程の充実に向け、教育目標や内容、学習・指導方法、評価等の一体的・実証的な検討を行うことを目的としている。平成25年度まで実施した「教育課程の編成に関する基礎的研究」では、これからの社会で求められる資質や能力について、諸外国の教育改革の動向や国内における先進的な実践研究の成果、学習科学の進展などに基づいて分析し、教科等横断的に育てたい汎用的な資質・能力として位置付け、資質・能力と知識・技能を結び付けた教育課程編成の基本原理を整理した。本研究では、その成果を踏まえ、教育目標や内容、学習・指導方法、評価等を一体的に構想するための基本原理を整理した上で、学校における教育課程編成に向けた実践的課題を明らかにするための基礎資料を収集・提供することとした。

(2) 調査研究の概要

本報告書は、これまでの研究で実施してきた、育成を目指す資質・能力や求められる学習・指導方法の検討を踏まえ、特に学習評価に焦点を当てながら、資質・能力を育成する教育課程の充実に向けた学習評価の在り方や学校における評価の取組への支援方策について、国内外の動向並びに国内の学校や教育センター等における実践事例等の資料を収集し、これまでの取組の成果や今後の課題をとりまとめたものである。

【研究期間：平成26～28年度、研究代表者：梅澤 敦（教育課程研究センター長）】

2. 研究成果の概要

(1) 学習評価の変遷と今後の方向

我が国の教育課程の基準及び指導要録等に見る評価の考え方の歴史的な変遷について先行研究や資料を紹介して示した。特に、資質・能力の育成に向けた学習評価の在り方の検討に資するため、指導と評価の一体化の考え方や観点別評価の導入と現状について確認した。学習評価の変遷を概観して、我が国の教育政策上、「形成的評価」に当たる考え方が、「目標に準拠した評価」や「指導と評価の一体化」として従前から重視されてきたこと、そして、それらの評価が学習指導要領改訂で一層の充実が図られるなど、児童生徒の「学習のための評価」(Assessment for learning)の実現が大きな課題となっていることを確かめた。

(2) 国内における評価の取組

①目標に準拠した評価に関する研究

第3章では、国内における評価の取組事例を明らかにする。1節では、国立教育政策研究所教育課程研究センターの事業として平成18年度から21年度まで実施された「評価の工夫改善に関する総合的推進地域事業」における実践研究とその成果を確認した。この事業の特徴は、地域内の複数の小・中学校、教育委員会、教育センター等の複数機関が協働で評価研究や研修に取り組んだことである。各推進地域の成果報告から、評価規準をもとに実際に評価を実施していく上で、授業における子供の具体的な学び姿の評価をめぐる教員間での「すり合わせ」や評価規準の設定についての協議（図1参照）など、グループ・モデレーション（調整）が、評価の根拠や基準の共有とともに、子供の学びのプロセスを見取ろうとする意識を高めるのに役立つことが示唆された。

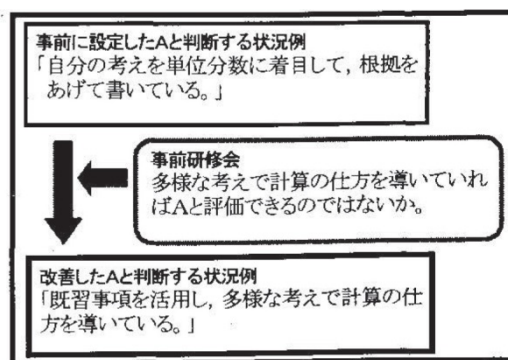


図1 評価規準をめぐる協議の具体例（呉市）
（国立教育政策研究所，2009，p. 31より抜粋）

②国立大学附属学校調査

全国国立大学附属学校に対し、学習評価の取組に関する質問紙調査を実施した。2節では調査結果をもとに実践研究の動向と課題を分析し、3節では、資質・能力を育成する教育課程の在り方を研究している学校における取組を学校別に紹介した。

国立大学附属学校調査から、各学校では、資質・能力の評価に関して、パフォーマンス評価やポートフォリオ評価、子供の自己評価など、ペーパーテスト以外の様々な評価方法を工夫し、多面的・多角的な評価に取り組んでいることがわかった。特に「思考・判断・表現」の観点について、外からは見えにくい「思考」のプロセスに関する外化の仕方などの研究が多かった。その一方で、教育目標（重視したい資質・能力の特定）や教育内容・方法（それらを育成する授業の在り方など）に関する研究に比べ、評価に関する研究はそれほど進んでいないとする回答も見られた。

調査結果に基づき、資質・能力の育成に向けた評価を充実させていくための課題として、①資質・能力の育成に向けた評価観の確立、②評価の妥当性・信頼性の確保、③日常的な指導に生かせる評価の両立（長期的な評価と並行して取り組む必要性）、④情意にかかわる資質・能力の評価、⑤評価観や評価規準の共通理解や共有などを抽出した。

③国際バカロレア学校における評価

国際バカロレア学校における資質・能力の評価についてその理念や取組を紹介した。国際バカロレアにおける評価では、認知面と情緒や社会性を含む資質・能力を重視したカリキュラム開発と連動して、「探究」・「行動」・「振り返り」という一連の学習経験をテーマ学習に組み込み（図2）、

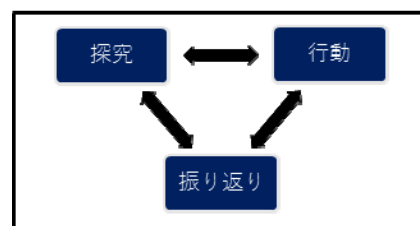


図2 IBが重視する学習経験（国際バカロレア，2016，p. 111に基づき作成）

資質・能力を評価する体制を構築している。評価の考え方の特徴として、①学習者中心、②評価規準に準拠したアプローチ、③形成的評価の重視、④子供の自己評価の活用、⑤バカロレア評価機構による外部評価と学校教員による内部評価の併用などが挙げられる。

④教育センター・教育委員会等調査

評価に関する学校や教師支援に向けた研究や研修の取組について、全国の教育センター、都道府県・政令指定都市・中核市の教育委員会並びに全国の教育事務所に質問紙調査を実施した。教育センター・教育委員会では、指導と評価の一体化や各教科における評価の在り方などを主題とした研修が幅広い年代で実施されていた。その反面、評価に対する教員や学校の関心は、指導方法や授業改善に比べて低いという課題も示唆された。今後の研修・事業の課題として、①評価に対する教員の意識、②指導と評価の一体化の推進・定着、③教員の観点別評価に対する理解の温度差、④多様な評価方法の理解と活用の在り方など、主として教員の評価への理解や学校への定着に関する課題が多く指摘された。

報告書では、特に評価に関する研究や研修に取り組んでいる教育センター・教育委員会の取組を紹介している。複数の学校と協同で実施された実践研究では、目指す資質・能力を設定し、指導と評価を実践、更に改善に取り組むカリキュラム・マネジメントの中に評価が位置付けられていた。

今後は、観点別評価の見直しに伴う様々な評価資料や研修が増えると予想される。研修や指導資料作成に向け、教育センター・教育委員会からは、実践に役立つ具体的な解説資料や事例の提供を求める声が上がっている。

(3) 諸外国における評価の取組

諸外国の教育課程と改革動向を特に評価に焦点を当てて比較した。各国では、特にエビデンスを基にした授業や教育課程のデザインが一貫したテーマとなっていることが明らかになった。資質・能力を育成する教育課程に取り組んできた歴史のあるイギリス、オーストラリア、ニュージーランドの三か国では、評価を子供の学習の改善に資するよう位置付ける方針を明確化・共有して評価体制を構築し、子供の学習をエビデンスに基づいて把握するための多様な手法やツールを開発していることが明らかとなった。

(4) 今後の課題

本研究の成果から、資質・能力を育成する教育課程の充実に向けた学習評価の在り方に関する研究上の課題として、次の点を確認した。

①指導と評価の一体化への支援

国内において先進的な実践研究に取り組んでいる国立大学附属学校への調査でも、教育センター・委員会への調査においても、評価に関する研究や実践への関心は、指導方法や授業改善に比べて高くないことが示されている。こうした傾向は、指導方法と評価を切り離して捉えることで助長されてしまうと考えられる。指導方法の中に評価を組み込み、一体的に計

画・実践できるようにすることで、学習評価を授業づくりの一連のプロセスに位置付けるような単元計画作成・授業づくりを提案していく理論的・実践研究が有効であろう。

②多面的・多角的な評価の効果的な活用

国立大学附属学校の様々な実践研究からは、多様な評価手法を相補的に活用して「多面的・多角的」に子供の学びに迫ろうとする研究動向が見て取れた。その一方で、こうした取組の実施校からもコストや負担感が課題として指摘されている。また、教育センター等への調査から、評価の趣旨を理解しても学校への定着が困難との指摘も得られた。

国立教育政策研究所教育課程研究センターの事業で実践された教員が協働で評価に取り組むモデレーションは、複数の国立大学附属学校、諸外国ではニュージーランドなどで、教師の力量を高める上でもまた、評価の妥当性を確保する上でも有意義と位置付けられ、推進されている。学校と教育センター・委員会等の機関が協働して多面的・多角的な評価に取り組む体制づくりに取り組むことが求められている。

③子供の自己評価活動から学習評価へ

附属学校の実践、国際バカロレア学校のプログラム、諸外国の教育政策など、今回調査した様々な取組の多くで、子供による自己評価活動が重視されている。また、諸外国においても、「評価活動の中心は生徒である」（ニュージーランド）という視点で評価の新しい方向性が打ち出されているように、子供自身の自己評価と自己評価力を育成する取組が重視されている。振り返りなど子供の自己評価活動を学習活動として位置付けるとともに、それらの学習活動を評価して指導に生かす教師による形成的評価を充実していくための研修体制・授業づくりを支援する実践研究を学校や教育センターと連携しながら充実していく必要がある。

本研究では、資質・能力を育成する教育課程の在り方について、目標・内容・指導方法、評価等を一体的に構想するための基本原理を整理するとともに、実践のための基礎資料を提供することを目標に研究を進めてきた。本報告書では、特に評価に焦点を当て、学習評価の現状や今後の方向性を確認した上で、資質・能力の育成を見据えた先行的な様々な実践を収集して、資質・能力を育成する教育課程を各学校において編成していく上での学習評価をめぐる課題を明らかにした。今後は、本研究で同定した諸課題の解決に向け、学校の実践研究と連携しながら研究を進めていくこととしたい。

【参考文献】

- ・国立教育政策研究所教育課程研究センター(2009)。「評価の工夫に関する総合的推進地域事業研究報告(平成18・19年度)」。
- ・国際バカロレア機構(2016)。「MYP: 原則から実践へ」。(<http://www.ibo.org/contentassets/93f68f8b322141c9b113fb3e3fe11659/myp/myp-from-principles-into-practice-jp.pdf>) 。
- [International Baccalaureate Organization(2014). *MYP: From principles into practice* の日本語版] 。